

平山豊子さん(74歳・写真1)は、パーキンソン病だ。夫の哲幸さん(78歳・写真4)が介護していたが、自らも要支援となり、娘の美穂さん(48歳・写真3)が昨年から同居するようになった。パーキンソン病は服薬管理がデリケートだ。美穂さんは、1日7〜8回服用する薬を小分けにし、ショートステイの利用に備えている。



大町由里さんが広げているのは親戚が作ってくれたという豊子さんご自慢の服。前傾姿勢になりがちな豊子さんの腰が露出しないように、臀部に当たる部分に余裕をもたせて縫製しているという(写真2)。哲幸さんは、外洋航路の船乗りだった。手にするのはシロナガスクジラのひげ(写真4)。大町さんは、そんな小さな喜びや思い出を大切にしている。



愛知県の大学病院の病棟看護師を経験し、郷里長崎の個人病院に仕事の場を移した。外来勤務のとき、患者に付き添ってきたホームヘルパーに興味をもった。やがて、訪問看護師となり、病院では思い及ばない患者の素顔や普段着の生活を知った。

「買い物に炊事や掃除…、今思えば、ホームヘルパーのような看護師でした」

大町由里さんは、「利用者の生活を支えようとすると自然にそうなった」と訪問看護師時代を振り返る。

その後、在宅介護支援センターを経て居宅介護支援事業所のケアマネジャーとなった。

「病院勤務時代には、私の代わりが複数いましたが、ケアマネジャーは、そうはいきません。利用者それぞれの生活を24時間引きずっている感じがしたものです」

看護師資格をもつケアマネジャーが次々に看護職に戻っていく姿を目撃しながら、大町さんは「ケアマネになってよかった」と日誌に書き続け、なんとか踏みとどまった。

忘れられない利用者と出会ったのは、ケアマネジャーになって数年目の頃だった。認知症の妻を夫が介護している老々世帯を担当した。その夫に苦しめられたのだ。

「今からすぐに来い！」

一日に何度も電話が掛かってきた。威圧的な物言いに抗することもできず、すぐに駆けつけると「こんなことで呼びつけなくてもいいのに」と思う要件もしばしばだった。しかし、おざなりな対応をすると厳しい叱責が飛